編集室

気が早いと思われるかも知れないが、夏が終わると心は箱根駅伝に向かい始める。

もうずいぶん前のことになる。当時、二日の往路は必ず5区の「鈴廣」前で応援していた。各校の幟がはためく沿道は鈴なりの人だ。遠くで点滅していた赤色灯がグングン近づいてくる。先導する白バイの後に選手の姿が見える。小旗が激しく振られる。各校の選手に大きな声が飛ぶ。そして、全ての選手が箱根の山路に消えてゆくと、沿道の応援者は一斉に「風祭駅」へと向かう。登山鉄道の小さな駅のホームは一杯で入場制限となっている。

暫く時間をつぶしてホームに上がった。何度か電車が乗客を飲み込んでいったあとで、ホームの人影はまばらになっていた。そんな中、ベンチにポツンと座っている一人のお婆さんが眼に入った。手に応援用の小旗を持っている。思わず声をかけた。話によると、この箱根で育ったのだという。コースは今と違い、道も未舗装だから、選手が走りやすいように竹箒で掃いたのだという。遅れた選手には、特に大きな声をかけて励ましたという。いまは伊豆に住んでいるけれど、どうしても選手に声をかけたくて、毎年、息子の反対を押し切って出て来るのだそうだ。

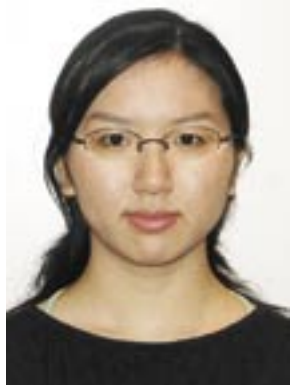
その話を聞いて、箱根を支えているのはこういった人たちだと、胸に熱いものを感じた。電車が入ってきた。立ち上がったおばあさんの腰が少し曲がっている。

さて、母校の選手達は今度の箱根でどんな走りを見せてくれるだろうか。箱根駅伝まであと百日余り。今から楽しみだ。

ところで、あのお婆さんは今でも元気でいるのだろうか。急に気になってきた。

（入試・広報センター事務部長　尾留川一彦）

表紙・絵



いかにも学生らしい、こんな真面目な姿を描いておくべきではないか。よし、これでいこう。

耽ける……物思に耽ける、勉強に耽ける、ときもある。

――試験が数日後に迫る、7月のある昼下がりのことでした……。

何描こっかなぁ……と考えあぐねていた。そんなとき、目にとまったのは教科書に目をやる友人の姿。「！」

（文学部1年　西麻衣子＝美術倶楽部CATS）

Hakumon ちゅうおう Chuo

2004

秋季特別号

2004（平成16）年10月15日発行　No.188

発行　中央大学広報委員会

〒192-0393
東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

広報課　☎0426－74－2146

印刷　泰成印刷株式会社
〒130-0026
東京都墨田区両国3-1-12
☎03－3631－8141